

子どもの運動の多様化に関する一考察

—東北文教大学附属幼稚園課外運動教室における ボール遊びの実践を通して—

阿部 弘生・石井 裕明・山崎 裕美
阿部 美樹・大場 美咲

全国で多く開催されている専門の指導者による幼稚園の運動教室においては、特定の種目のみを繰り返し、さらに運動能力の向上にも効果がないという報告がされている。一方で、子どもの自由に任せた遊びでは、運動量は増えるものの個人の運動パターンに隔たりがあるともされている。そこで本研究では、＜運動の多様化＞に焦点を絞り、指導者が様々な動きを提示する時間と子どもの思いに任せて自由に活動できる遊びの時間を組み合わせ、子どもの＜運動の多様化＞に貢献できる運動教室のあり方に関して、ボール遊びの実践を通し、実際の子どもの姿を捉えながら考察を行った。その結果、自由な遊びの時間において、＜運動の多様化＞が確認された。しかも、運動の提示が＜運動の多様化＞に貢献できたことが明確になった。さらに、3回を通して行った研究期間に表れた運動パターンを繰り返すことにより、＜動きの洗練化＞が起こっている様子が確認できた。

I. はじめに

(1) 研究目的

筆者らは、未来を担う子どもたちの育成に大学・養成校と幼稚園の連携が必要と捉え、課外運動教室¹における問題点の抽出と、それを活かした実践・検証の積み重ねを動機の始点とし、子どもの＜はずみ動作＞獲得に関して分析を行ってきた²。

課外において運動教室を実施している園は東北文教大学附属幼稚園（以下、附属幼稚園という）に限ったことではない。吉田らの調査によると、運動遊びのみを指導する指導者がいる幼稚園は過半数を占めており、かつ運動指導者がいないという幼稚園教諭よりも運動指導者がいるという教諭の方が体力向上のマラソンや鉄棒、跳び箱等の技術指導を行う必要性を高く持ち、園で行われている運動指導者による指導に対する満足度も高いという結果が出ている³。一方で、多くの幼稚園で行われている運動

教室に対して、否定的な調査結果が出ていることも看過できない⁴。例えば、特別な運動指導を行っている園と行っていない園との運動能力を比較した場合、後者の運動能力が有意に高く、ほとんど全ての運動、運動のやり方、きまりやルール、目標や課題を指導者の決定によって行っている園の運動能力が最も低いといった調査結果が報告されている⁵。さらには、指導者主導の小型化した運動の技術指導をすればするほど運動能力が低くなってしまふとまで言われている⁶。

上述したように、運動教室の結果が指導者にとっては残念な結果に陥っている原因として、運動の技術指導に重きを置いた運動指導を行う場合、一斉指導の形で行わざるを得ず、説明を聞いたり、順番を待ったりしている時間が長くなることから、子どもが体を動かす時間が却って短くなっていること、また特定の運動指導を行うことで同じような運動のくり返しが中心となり、運動発達にほとんど貢献していないことが考えられている⁷。実際に、吉田ら⁸や杉原ら⁹による調査において、保育の一環として行われている活動に、体操、水泳、サッカー、マラソンなど特定の種目が多く挙げられていることから、運動教室の内容が大人の動きに近付けるための指導になりがちであり、技術指導としての大人のスポーツ文化¹⁰を刷り込む形で行われていることが多く、子どもの運動の発達としては不自然なものになっていると考えざるを得ない。

ここで、子どもの運動の発達について重要な＜運動の多様化＞と＜運動の洗練化＞について考える必要が出てくる。人間が生きる上で必要な基本的動作の多様化と洗練化は、乳幼児における身体活動を伴った遊びや生活行動に依存するとされ¹¹、子どもの運動指導を進めるにあたって欠かすことのできない視点である。中村らは、運動パフォーマンスの経年的な低下のみではなく、動作様式そのものの発達が未熟な段階にとどまっていることを報告しており、今日の少年期以降の体力・運動能力の低下の要因の一つであると指摘している¹²。つまりは、＜運動の多様化＞の減少傾向が運動能力低下の一つの要因であるにも関わらず、運動指導のあり方が＜運動の洗練化＞を目指してしまいがちなことが、上述した運動教室の現状の根本にあると捉えることができよう。さらに、マラソンのように運動のバリエーションがない運動を「幼児期にふさわしい運動とは言えない」¹³と杉原が指摘している通り、幼児期だからこそ必要な運動の指導があるべきであり、そのためにも＜運動の多様化＞を念頭においた指導が必要であると考えられる。従って、これまで＜運動の洗練化＞の方向に向きがちであった運動教室のあり方に対して、＜運動の多様化＞に焦点を絞ることで子どもの運動発達に貢献できるのではないか。さらにいうと、ここに運動教室の意義があるのではないだろうか。ここに問題の所在がある。

以上より、本研究は子どもの＜運動の多様化＞に貢献できる運動教室のあり方に関して、実践を通し、実際の子どもの姿を捉えながら考察を行うものである。

(2) ＜運動の多様化＞と＜運動の洗練化＞

上述したように、子どもの運動の発達には、＜運動の多様化＞と＜運動の洗練化＞がある。この点について整理しておきたい¹⁴。

『幼児期運動指針ガイドブック』によると、幼児期の動きの獲得には、獲得する動きの種類を増大させていく多様化と、基本的な動きの運動の仕方（動作様式）がより合理的・合目的になる、つまりは基本的な動きが質的に変容する洗練化の2つの捉え方があるとされている¹⁵。他にも、多様な運動形態がバランスよく習得される運動

の量的発達と、それぞれの運動の仕方が年齢相応に習熟していく運動の質的発達と表現されることもある¹⁶。

ただし、＜運動の多様化＞と＜運動の洗練化＞は全く別なものではないということを踏まえておく必要がある。人間が動きを獲得していく過程において、その基礎となるものが＜運動の多様化＞であることは間違いない。どんな動きも、見たり、聞いたり、体験したりしていなければ誰もが行うことのないものである。一つの体験したことのない動きを経験する＜運動の多様化＞が前提にあり、それを繰り返すことで上手になっていく＜運動の洗練化＞がなされるということである。さらに言うと、幼児期の初期（3歳から4歳頃まで）において力みやぎこちなさが見えた動きが、年齢と共に無駄な動きや過剰な動きが減少して動きがなめらかになり、目的にあった合理的な動きになる¹⁷。例えば立つや歩く等の「動きをするようになった」「動きを行おうとしている」という言葉が＜運動の多様化＞を、「動きが上手になった」、「動きができるようになった」という言葉が＜運動の洗練化＞を表しているということである。そのため指導者には、「やろうとしない」と「やったことがない」、「知らないからできない」と「知っているけどできない」では意味が全く異なるということを押さえた運動指導が求められてくる。例えば「投げる動作」の発達段階の特徴として動作パターンの図がよく用いられるが、そもそも「投げる」という動作そのものを知らなければはるが無く¹⁸、ここに指導者の介入が必要なことは言うまでもない。

（3）東北文教大学附属幼稚園年中児におけるボールへの関わりと運動

本研究は課外運動教室の子ども、つまりは附属幼稚園の年中児を対象とするものである。論を進めていく上で、現在の子どもの姿についても触れておきたい。

附属幼稚園では、毎年10月に行われる創立記念日において、年少児がボール、年中児がリボン、年長児がフラッグを用いた遊びを発表している。年次が上がるにつれ、素材や重量が変わり、操作の難易度が高い用具が選ばれ、子どもの発達に応じた発表が展開されている。そのため、ボールを投げる、転がす、ボールの上に座る等、ボールと関わることに對して年中児は既に慣れ親しんでいるといえる。そして、年長組で流行となるサッカー遊びを一緒に行う姿がみられるようになり、年中児の特に男児は年長児と一緒に遊ぶ場面が散見される。ボールを蹴る、転がってきた（あるいは飛んできた）ボールを止める、何かをねらって蹴る等のできる子どもの姿が日に日に増えているように窺える。一方で、ボールをつく、投げる、受ける等の動作が少なく、コントロールを要するキャッチボールを行う姿はなかなかみられず、投げることよりも転がす子どもが多くみられる。ただし、サッカー遊びを行わない子どももおり、遊びに関わらない子どもはまったくといっていいほどボールを上手く扱うことができていない。さらに、積極的に運動を行おうとする子どもほどボール遊びに夢中になるように窺える場面が少なくない。また、ボールを転がしたり、投げたりという使い方を意識することなく、おなかの下に置いて寝ころんで楽しむ姿もみられるようになってきている。他にも、ボール遊びに近い遊びとして、誕生会を利用して風船を運ぶ競争をしたことがきっかけとなり、風船で遊ぶ姿がみられるようになってきている。

ここまでみてきたようにボールには、リボンやフラッグと比べて、操作する運動の他にもボールそのものに関わりながら（ボールの上に乗る、ボールを追いかける等）遊びを展開できる特徴があるといえる。しかし、グラウンドのような園庭でのボール

遊びや、ルールを決めながら行うスポーツ的な運動（サッカー等）のみで、その特徴を活かしきれるとはいえないだろう。

ボール運動以外に気になる点を挙げてみると、逆さまになることや不安定なところでバランスを取ることに對する恐怖心が強く、鉄棒の前回り下りができない、トランポリンや平均台などのバランスが必要な運動を避ける傾向がある。また、走り方もぎこちなく、足裏全体でバタバタと音を立てて走る子どもが多く、リズム感を必要とするスキップやギャロップができない子どもが多い。また、腕や手を使ってぶら下がる等、何かをつかんで登るような運動が少ないようにみてとれる。

人の基本的な動きに関しては、体育科学センター調整力専門委員会体育カリキュラム作成小委員会¹⁹や『幼児期運動指針ガイドブック』²⁰、中村和彦²¹等によって具体的に示されているが、大きく「体のバランスをとる動き」、「体を移動する動き」、「用具などを操作する動き」の3つの基本的な内容に動きを分類することができる。しかしながら、同じ歩くであっても、体育館のフロアを歩くこと、園庭の土の上を歩くこと、でこぼこな道を歩くこと、速く歩くこと、何かを持ちながら歩くこと、それぞれで運動は異なる。そのため、操作も比較的簡単であり、関わりの方の自由度の高いボールを教材として、様々な用具と触れ合いながら遊びを展開することで上述した様々な課題に對応することができると思う。

(4) 研究方法

研究方法を述べていくにあたって、＜運動の多様化＞に貢獻するための運動教室の進め方についておさえておきたい。

運動の内容よりも運動指導のあり方に問題があると明言した古屋は、幼児が自発的に行う運動遊びプログラムを構築するための基礎資料を得るべくジリボを用いた実践を検証している²²。対象児が多様な用具特性に応じて自ら様々な遊びを引き出したこと、対象児自身が回転する遊び方を最も好んでいたこと、模倣遊びがみられたこと等を報告している。一方で、個々の運動内容に関しては、一人当たり観察された運動の内容に隔たりが生じたとも述べており、自発性はあるものの、＜運動の多様化＞を引き出す方法に関してはまだ検討の余地があることを示唆している。杉原も、「全てを子どもたちに決めさせるのが必要なのではなく、子どもたちの自己決定と保育者の指導性（決定）のバランスが重要である」²³と明言している。一つの運動の上達を目指すのではなく、様々な運動経験を通して、結果として運動の上達がみえるようなあり方が求められているといえよう。つまり、子どもの主体性に任せることによって運動パターンに隔たりを生じさせているということは、指導者の運動パターンの提示不足が考えられ、あらゆるバリエーションの運動パターンを提示しながら、子どもたちが自己決定で行う遊びへと向かわせる、いわば子どもの主体性と指導者の意図・指示を組み合わせる指導バランスが大切だということである。子どもの自己決定を尊重するという事は決して自由放任ではなく、経験させたい活動を子どもがやりたいと思うような遊び要素を含んだ方法で指導するという事ともいえる²⁴。

さて、課外運動教室では、年20～22回通して行う上で、60分のうち最後の10～15分はボールを使用した遊びの時間としている。この時間は、特別な指示を出すことなく（安全面から協力して使うこと、人の顔に向かって投げないことのみ約束事として決めている）、子どもが思い思いにボールと関わる時間としている。ボールを遠くへ

投げる、高く投げる、まりつきのようにドリブルをする、大きいボールにおいては1人～複数人で転がす、持つといった動きが顕著にみられる。しかし、これまでは自由時間²⁵になると同時に指導者がボールをフロアに出すだけであり、一斉指導の際に用いることはしてこなかった。これまでみてきた先行研究でもあるように、自由な時間にすればするほど子どもたちの運動量が増えてはいるが、一方で1人1人を観察するとボールとの関わりが画一的になってしまいがちであり、同時に運動パターンに関しても隔たりが出てしまっているように見受けられる。

以上より、本研究では一斉指導の際に様々なボールとの関わりや運動を提示し、その後ボールを使用した自由時間を設け、子どもたちの〈運動の多様化〉に寄与できる可能性を検討することとした。

記録はデジタルビデオカメラを体育館ギャラリー南東に1台設置した。対象日は2015年11月6日、11月13日、11月27日の3日間、いずれも14時20分から15時20分の60分間、場所は東北文教大学体育館で行った。

分析方法としては、自由時間におけるボールとの関わりや運動を数え上げ、提示したもののとの関連を考慮しながら考察した。ただし、自由時間には指導者も入り込むため、指導者と関わっているうちに子どもの遊び方を誘発する可能性は十分にある。この点についての観察・分析は別稿に譲ることとして、本研究においてはあくまで子どもたちにどのような動きが出現したかどうかをみていくこととする。また、拙稿²⁶と同じく、個々の事象について数値化することはせず、現場の教員による観察の視点を重視した上で、全体的な数として把握することに努めることとする。なお運動の記述に関しては、筆者ら計5名が相互に確認をとりながら映像をみることで観察・記録を行った。本研究の執筆は、I、IVを阿部(弘)、石井、山崎、阿部(美)、大場が、II、IIIを阿部(弘)がそれぞれ担当した。

II. 提示したボールとの関わり・運動と子どもの姿

(1) <第1回目(11月6日)>

初回においては、ボールを「持つ」、「持ちながら～する」運動に重点をおいて進行した。具体的に提示したボールとの関わり・運動は表1の通りである。ただし、様々な提示を指導者がしたとしても子どもたちはその中で自分の思いでボールと関わり、運動を行う場面が少なくない。さらに一斉指導の際は、当然のことながら場所を変更するための移動時間や他の子どもを待っている時間も存在する。その際に子どもたちは自然とボールに関わり、運動を行うこともある。従って、その姿も表1に記しておくこととする。

表1：11月6日における提示したボールとの関わり・運動と実際の子どもの姿

	提示したボールと関わる運動	実際の子どもの姿
ボールの操作	(1)床に落とさずに、指導者が言葉にした体の部位にボールをつける 頭・へそ、肩、膝、足の裏、右手、左手 (2)体の周囲に回す 腹、首、尻、腿、右足、左足 (3)上に投げ、床に落ちないうちにキャッチする (4)床にたたきつけ、はずませてキャッチする (5)ドリブルのように両手で連続してはずませる (6)下手で頭上高くに投げる (7)股の間にボールをはさむ (8)床面に設置したかごに投げ入れる (9)跳び箱上に設置したかごに投げ入れる	・頭の上にボールを乗せようとする ・アンダーハンドとオーバーハンドで投げる子どもがそれぞれいた
ボールの操作と移動の組み合わせ	<持ち方は自由> (1)足にボールをはさんだままジャンプする (2)足にボールをはさんだままジャンプして前進する (3)指導者を走って追いかける (4)フロアーに引かれたラインを踏まないように走る (5)平均台の上を渡る (6)平均台をまたいで越える (7)コーンの間を跳ぶ	・両足を大きく横に開いて、平均台をまたぐように歩く ・平均台の上を渡る ・平均台の上に一度乗ってから越える ・持ったまま這うように渡る
	<頭上で持つ> (1)線を踏まないで走る (2)ジグザグに歩く・走る (3)平均台をジグザグにまたいで進む	・指先を遠くに向けて持つ子どもと、手前に向けて持つ子どもがいた
	<床から離さない> (1)転がして前進・後退 (2)上に座って前進・後退	
	<片手で持つ> (1)平均台をジグザグにまたいで進む (2)ジグザグに歩く・走る (3)足を横に開いて平均台を両足でまたぐように進む	・おしりを擦って進む
その他の移動の時間や待ち時間		・走っている途中に前に転がし追いかける ・床にたたきつける ・投げて、追いかける ・コーンの周囲を回る ・上に高く投げる ・蹴る ・コーンの先端にボールを置こうとする

(2) <第2回目(11月13日)>

初日にボールを操作することに重点を置いてきたことを踏まえ、2回目はボールそのものにどのように関わっていくかを提示することに重きをおいた。さらに、嗜好性の高い高低差を設けるため、跳び箱を階段状にし、ボールと関わりながら跳び箱に乗り、そこから飛び降りる、またはセーフティマットに飛び込む等の運動を取り入れた。さらに、持つだけではなく、転がす、蹴る等の運動を取り入れたが、その際子どもたちが転がす意欲を持てるように、平均台とゴールを組み合わせ、ボールがゴールを通り抜けられるようにした(写真1)。



(写真1)

表2：11月13日における提示したボールとの関わり・運動と実際の子どもの姿

	提示したボールと関わる運動	実際にみられた子どもの姿
ボールの操作	(1) 床に落とさずに、指導者が言葉にした体の部位にボールをつける 頭、腹、肩、肘、膝、尻、かかと(左右)、首、足の裏(左右) (2) 両足ではさむ (3) 体の周囲にまわす 頭、腹、腿(左右)、両足 (4) 床にたたきつける (5) 天井めがけて高く投げる (6) バasketボールのドリブルをする	・顔面にボールを押し付けている ・両足ではさんだまま自然にジャンプする ・上に投げる ・ボールを持ったまま跳び箱に乗る ・何度かバウンドさせ、タイミングをみてキャッチする ・キャッチできずに転がったボールを追いかけ、飛び込んでいく ・キャッチできずに転がったボールを追いかけ、蹴ろうとする ・上に投げる ・床にたたきつける ・両手でドリブルしようとする
ボールとの関わり	(1) 転がしてゴールに入れる (2) 蹴ってゴールに入れる (1) 床に置いたボールに、指導者が言葉にした体の部位をつける 足の裏、膝、かかと、肩、へそ、背中、頭、耳、尻 (2) 床に置いたボールに、指導者が言葉にした体の部位をつけ、一回転する 尻、へそ、膝	・投げて(上から、下から)ゴールに入れる ・ボールを抱きかかえてうつぶせに寝る
ボールの操作と移動の組み合わせ	(1) 両足でボールをはさんだままジャンプする <頭上で持つ> (1) ジグザグに歩く、走る (2) コーンの間を跳ぶ (3) 平均台を横歩きで渡る (4) 平均台をジグザグにまたいで進む (5) 跳び箱で作った段差を歩く (6) 持ったまま跳び箱からセーフティーマットに飛び降りる	脇に抱える ・歩いて渡る ・両足を開いてまたぐようにして歩く ・飛びながら上に高く投げる ・飛びながらスローインのように投げる ・先に落としてから慎重に降りる ・跳び箱の上を転がして、落としてから降りる
	<へそ前に持つ> (1) フロアー上に引かれたラインを踏まずに移動する (2) ジグザグに走る (3) ボールの間を跳ぶ (4) 平均台を渡る (5) 足を開き、片手は平均台につきながら移動する (6) 跳び箱に手をつき、ゆっくり降りる	・足を開いて、片手を挙げてまたぐ ・跳び箱の上で高く投げようとする ・両手に持って飛び降りる ・片手に持って飛び降りる
	<上に座る> (1) 片足を浮かす (2) 両足を浮かす	・自然とはずむ
その他の移動の時間や待ち時間		・持っているボールを何度も落としてはずむか確かめる ・持ったままケンケン ・はずませてキャッチを繰り返す ・バウンドしてくるボールの上に手をかざす ・上に投げてキャッチ ・頭上を持って歩く ・肩にかつぐように持って走る ・上に投げて、床にはずませてキャッチ ・蹴る ・ハイハイをしながら手で前にボールを転がし前進する ・Basketボールのドリブル ・床にたたきつける ・仰向けで抱きかかえる ・高く投げようとする ・自分で蹴って、追いかける ・持ったまま膝をつけて歩く ・お腹の下に置き寝る ・座った状態でドリブルをする ・上に投げてバンチング ・自分で投げて追いかける ・セーフティーマットの上を転がす ・ほふく前進でボールを運ぶ

(3) <第3回目(11月27日)>

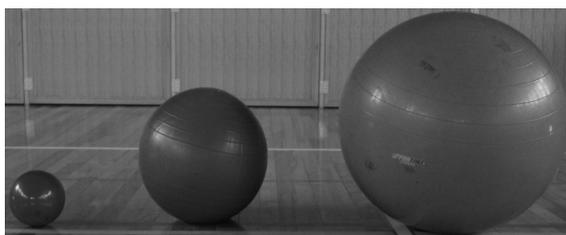
第3回目では、これまで1人で1つの小さいボールと関わってきたが、自由時間の中では大きいボールを提示しており、複数人で関わる場面が多くみられることから、大きいボールを2人で操作する(持つ、転がす+階段状のところを転がす)運動を取り入れた。

表3：11月27日における提示したボールとの関わり・運動と実際の子どもの姿

	提示したボールと関わる運動	実際にみられた子どもの姿
ボールの操作	(1) 頭上に肘を伸ばして掲げる (2) 持ったまま肘を前に伸ばす (3) 持ったまま肘を前に伸ばした状態で、回転する ※周囲との距離をとるため (4) 上に投げて複数回拍手してキャッチ (5) 両手でドリブル(リズムを変えて) (6) 片手でドリブル (7) 片手で床にたたきつける (8) 片手で床にたたきつけ、はずんできたボールを足でタッチ (9) 片手で床にたたきつけ、一回転してキャッチ	<ul style="list-style-type: none"> ・上に投げて、床ではずんできたところを利用してドリブル ・床に転がってしまったボールの上につぶせに乗る ・勢いをつけるために跳びながら行う ・足の甲に乗せようとする
ボールとの関わり	(1) 床に置いたボールに、指導者が言葉にした体の部位をつける 手(左右)、足裏(左右)、頭、尻、膝、かかと、へそ、おでこ、あご、耳 (2) 床に置いたボールに指導者が言葉に下体の部位をつけ、一回転する 尻、へそ (3) 長座の姿勢で、腰の辺りにボールを乗せ、上半身を寝かせると同時に 足を上げ、ボールが顔の方に落ちてくるところをキャッチ(すべり台)	<ul style="list-style-type: none"> ・2つのボールを抱えるように上に乗る、寝る ・両足を浮かせてバランスを崩す ・両足を浮かせて乗ろうとする ・両足を浮かせて両手で支えようとする
ボールの操作と移動の組み合わせ	(1) 両手で前に転がして、追いかけてキャッチ (2) 両足の間から後方に転がして、追いかけてキャッチ (3) 蹴って転がし、追いかけてキャッチ (4) 思いきり蹴り、追いかけてキャッチ	<ul style="list-style-type: none"> ・転がっているところを蹴る ・キャッチせず、蹴る ・蹴る時に一度前に転がして勢いをつける ・転がっているところをさらに手で転がす
2人1組でのボールの操作と移動の組み合わせ (中・大ボール)	(1) 2人でボールを転がしてジグザグに走る (2) 2人でボールを転がして平均台を越える (3) 2人で階段状にした跳び箱の上を転がす (4) 2人でゴールに投げる (5) 2人で持ってジグザグに走る (6) 2人で持って平均台を越える	<ul style="list-style-type: none"> ・走るのが遅い子ども速い子どもにはおいていかれてしまう ・平均台の上を転がそうとする ・1人が床、もう1人が跳び箱に乗って転がそうとする ・走るのが遅い子ども速い子どもにはおいていかれてしまう
その他の移動の時間や待ち時間		<ul style="list-style-type: none"> ・床にたたきつける ・わざと落とす ・抱え込むように持つ ・脇で抱える ・持ったまま両足で、フロアーに引かれたラインを飛び越える ・走りながら落としてキャッチ ・走りながら落として蹴る ・下から投げて追いかける ・頭上で持つ ・サッカーのドリブルで移動しようとする ・跳び箱の上を転がす ・ボールを上投げると同時に、平均台を両足で飛び越える ・持ったまま跳び箱に乗ろうとする ・床にたたきつけ、はずんできたところを蹴る ・自分の後方に向かって高く投げる ・持ちながら跳び箱を渡って移動する ・ボールを抱えた状態ではずむ

Ⅲ. 自由時間にみられる子どものボールへの関わりと運動

課外運動教室での自由時間では、大きさの異なる3種類のボールを使用している(写真2)。ここでは、それぞれの大きさに応じて、大ボール(青のバランスボール、直径約250cm)、中ボール(緑のバランスボール、直径約



(写真2)

150cm)、小ボール（様々な色のカラーボール、直径約70cm）と表記し、それぞれに対してのボールへの関わりと運動について述べていきたい。

(1) <第1回目（11月6日）>

表4：11月6日における子どものボールへの関わりと運動

	小	中	大
1	床にたたきつける	両手で転がす	下から転がす
2	脇の下にかかえる	片手で転がす	上から転がす
3	持ちながら平均台を渡る	下から両手で転がす	2～3人で転がそうとするが1人または2人が速く追いかける
4	足でドリブル	上から両手で転がす	3人で1つのボールを押し合う
5	蹴り飛ばす	下から片手で転がす	寝ている子どもに投げる
6	両手で上からかごに投げ入れる	上から片手で転がす	ステージ上に転がすようにのせる
7	両手で下からかごに投げ入れる	持ち上げる	ステージ上に1人でのせる
8	2つ並べて左右足でける	両手で持って走る	ステージ上に複数でのせる
9	複数(2～4個)持って運ぶ	抱いてしゃがむ?	ボールで人をはさむ
10	高い所に設置したかごに両手で下から投げ入れる	下から上に投げる(下手で)	転がしながら平均台を渡る
11	高い所に設置したかごに両手で上から投げ入れる	片手で床にたたきつける	引っ張ろうとする
12	片手で持つ	両手で床にたたきつける	蹴る
13	片手で持ちながら走る	腹をつけて上に乗る(足は接地)	倒したコーンの上を転がしながら進む
14	両手で持つ	持って左右に振る	
15	両手で持ちながら走る	人をねらって投げる(片手)	
16	空気の入っていないボールをぼうしにかぶる	上に座る(足は接地)	
17	空気の入っていないボールをぼうしにし、足を開いて平均台をまたぐようにして進む(手は頭上のボール)	うえにかかげる	
18	片足をボールの上ののせ、もう片足を床から離そうとする	上にかかげて走る	
19	つぶれたボールを持ったまま平均台を渡る	蹴って転がす	
20	片手にコーンを持ち、もう片手でボールを中にいれようとする	転がしながら走り、何かにぶつかりそうになって急に止まる	
21	跳び箱の上に設置したかごにシュートをする(上投げ、下投げ、片手)	2ペアで人の足にはさむ	
22	バスケットボールのドリブルをする	押していく	
23	バスケットボールのドリブルをしながら、平均台をまたぐ	ステージ上に1人でのせる	
24	平均台のかげに隠す	腹を付けてボールの上に乗る、足は離地、手が床	
25	持ちながら平均台を乗って、越える	2人で持って歩く	
26	バスケットリングにシュートする(上投げ、下投げ)	平均台の上を転がしながら移動	
27	転がっているボールを追いかけて飛び越え、先回りしようとする	ボールの上にコーンを載せる。(そのまま転がそうとするが失敗)	
28	落ちているボールやコーンをよけながらサッカーのドリブルする	バウンドさせたボールを蹴る	
29	足を開いて平均台をまたぐように乗り、ボールを転がしながら進む	押さえられたボールを押したり、引っ張ったりする	
30	持ちながらスキップをまじえ、跳ぶように走る		

これまで、ボールを持ちながら不安定な場所に挑戦する子どもはみられなかったが、ボールとの関わり・運動の提示後はボールと関わりながら平均台を渡ったり、またいだり、乗り越えたり、両足でまたいだまま進んだりする子どもがみられた。そして、ボールを投げてキャッチすることが嬉しかったり、もう少しでできそうだったりすることで何回も投げ込んでいる姿がみられた。また、つぶれたボールをぼうしのようにかぶりながら、そのボールに手を添えて平均台を渡る姿がみられた。あくまで、観察者としての眼ではあるが、小ボールでは床に置いたかごや、跳び箱の上に設置したかごにボールをシュートする（写真3）、中・大ボールでは転がす運動に取り組む姿が多くみられた。

さらに、指導者がボールの上に座るとそれを押したり、引っ張ったりすることを子どもが楽しんでいる姿がみられ、それにつられた何人かの子どもたちが真似をしながら同じようにボールで遊ぶ姿がみられた（写真3）。個人として見た時、自由時間での指導者の関わりは重要であり、この点についての詳細な検討は別稿に譲る。

また、ボール以外の用具との関わりにおいては、平均台を乗り越える、平均台を渡る、平均台の上で安定するところを探しながら寝る、足を開いてまたぐように座り、手をつきながら平均台の上を進む姿がみられた。さらに、置いてあるコーンを持ち上げて床にたたきつけたり、コーンを縦に振って内側に入ったボールを落とそうとしたりする姿がみられた。

提示したボールとの関わり・運動が自由時間の中で表れてきており、子どもがその運動を繰り返したり、関わり方を発展させたりする姿が明らかにみられた。



(写真3)



(写真4)

(2) <第2回目(11月13日)>

表5：11月13日における子どものボールへの関わりと運動

	小	中	大
1	片手で持つ	上から片手で転がす	1人、または複数で下から転がす
2	両手で持つ	下から片手で転がす	1人、または複数で上から転がす
3	脇の下にかかえる	うつぶせの状態を上への乗り、足を浮かす	両手でボールを打ち、自らもそのリズムで乗る
4	2個のボールを両脇の下に抱えて歩く	後退して転がす	2～3人で転がそうとするが1人または2人が速く追いかける
5	蹴り飛ばす	床にたたきつける	2人で横歩きで転がす
6	動いているボールを足で止めてから手でとる	床にたたきつけて弾んできたボールをキャッチしようとする	両手でたたきながらはずむような動きを見せる
7	片手で持って肩にのせ、走り、マットに飛び込む	セーフティーマットの上で、うつぶせの状態に乗る	ボール同士で押し合う
8	ボールの上でうつぶせでのり、両足を床から離す	セーフティーマットの上で、うつぶせの状態に乗る上でうつぶせの状態に乗る、足を浮かす	大ボールで中ボールを運ぶように転がす
9	足でドリブル	セーフティーマットを支えにして乗る	倒れている人に転がしてきて乗せようとする(つぶそうとする)
10	両手で軽く上に投げてキャッチ	座っていて、よりかかるように乗る	両手で持ち上げようとする
11	片手で下から持ち走る	転がっているボールを追いかけて、覆いかぶさって止めようとする	ステージ上に転がすようにのせる
12	両手で持ったまま跳び箱に乗りジャンプ	両手で持って運ぶ	ステージ上に1人でのせる
13	つぶれたボールをぼうしにして被る	転がしてゴールにシュートする	ステージ上に複数でのせる
14	2個のボールを両脇の下に抱えて歩く	両手で持ちながら跳び箱に乗ろうとする	
15	跳び箱からジャンプする時下から上に投げる	転がしながら跳び箱に乗る	
16	両手で上からかごに投げ入れる	バスケットボールのドリブルをしよとする	
17	両手で下からかごに投げ入れる	持ったままジャンプする	
18	ボールを抱える	足でドリブル	
19	片手でつかもうとする		
20	蹴って相手に渡す		
21	つぶれたボールを人にかぶせる		
22	座った状態で3個抱え、立ち上がって運ぼうとする		
23	片手とわきではさみながらボールを蹴る		
24	両手で上投いで人にぶつける		
25	ゴールに投げ入れる		
26	置いて蹴ってシュート		
27	転がす		
28	片手で登って片手で持ったままジャンプ		
29	片手で上から投げる		
30	片手で持ってセーフティーマットにのる		

第1回目にみられた動きは、第2回目においても多くみられた。また、繰り返し行われたことから、様々な動きの中でボールを落とす子どもが減り、〈運動の洗練化〉がみられた。自由時間では中・大ボールを取り入れているが、ボールの大きさに関わらずに蹴る、乗る、ドリブルする等といった〈運動の多様化〉が確認された。片付けの段階でステージ上に中・大ボールをのせる時の運動に変化はみられなかったが、1人でできる子どもが増え、できないにしても1人で行おうとする子どもも増えた。また、中・大ボールを持ちながら移動する動きにも変化がみえ、中ボールを持ちながら両足で跳ぶような動きがみられた。さらに、操作系の動きだけではなく、ボールの上に座る、ボールにお腹をつける、ヘディングをしようとする等、ボールへの関わり方のバリエーションが増えたことが確認できた。

用具との関わりにおいては、跳び箱の上から飛び込む、セーフティーマットに飛び込む等の動きが増えてきた。さらに、自由時間の中で平均台をまたいだり、乗り越えたりする動きが自然になり、同時にボールを持ちながら移動する等の〈運動の多様化〉が確認された。

第2回目においても、提示したボールとの関わりや運動が自由時間の中で表れてきていた。提示した運動を繰り返したり、ボールへの関わり方を発展させたりする姿が第1回目同様みられたといえる。

(3) <第3回目(11月27日)>

表6：11月27日における子どものボールへの関わりと運動

	小	中	大
1	投げてゴールにシュートする	1人で持つ	片手で転がす
2	転がしてゴールにシュートする	両手で持って運ぶ	両手で転がす
3	両手よりも片手で持って走る	持ちながら走る	一人～複数人で転がす
4	片手で脇の下に抱えて走る	転がす	足は接地したまま、背中から乗ろうとする
5	蹴り飛ばす	うつぶせに乗り、転がろうとする	後退して転がす
6	持って(1～2個)平均台に乗る	転がしている途中に誰かにぶつかりそうになり、止まる	平均台に乗せようとする
7	2つ持って跳び箱に乗る	投げられて小ボールを避けながら転がしていく	平均台の上を転がして歩く
8	2つのボールを持ったまま跳び箱からジャンプ	足でドリブルをしてシュートする	平均台に乗りながら、その横にボールを置き、転がす
9	上に投げてキャッチ	転がっているボールを追いかけながら、前方に蹴る	誰かにとられないよう体重をかけて乗る
10	走ってきて手でゴールにシュートする	足を浮かせて乗り、両手で体を支える	両手で持って走る
11	投げたボールが宙に浮いている間に、バウンドに合わせて蹴ってシュートする	バスケットボールのドリブルをしよとする	持ち上げて投げる
12	人をねらって投げる	持ちながら平均台に乗り、越える	平均台を渡る時、平均台の横のボールを転がす
13	2つ持って走る	自分は床にいたまま、ボールのみを1人で平均台、跳び箱に乗せて転がす	中ボールと押し合う
14	2つ持って人を追いかける	両手で持ち、片手でゴールに投げる	2つ同時にボールを転がそうとする
15	片手で小ボールをわきに抱えながら、	中ボールを片手で転がして走る	ステージ上に転がすようにのせる
16	2つ同時に相手に投げる	両手で持って走りながら落とし、そのまま転がす	ステージ上に1人でのせる
17	跳び箱の上から投げてジャンプして捕る	足を接地したまま、うつぶせに乗る	足を浮かせて乗り、両手で体を支える
18	かごにシュートする(片手・両手)	バウンドさせて蹴って平均台にぶつける	ボール同士の押し合い
19	蹴ってパスをする	バウンドさせて蹴って平均台に越えさせる	倒れている人に転がしてきて乗せようとする(つぶそうとする)
20	股の間を通して転がし、追いかけてキャッチする	中ボールと大ボールを利用して押し合う	
21	置いてあるボールをねらって蹴る	ボール同士をぶつけて押し合う	
22	バウンドさせて様々な方向(前、上、後ろ)に蹴る	1つのボールを2つのボールではさみこみながら押し合う	
23	2つを肩にのせる	セーフティーマットの上に乗せる	転がっているボールを追いかけ、しがみついてボールの勢いをとめる
24	2つをわきではさむように持つ	セーフティーマットの上に乗せ、その上にうつぶせで乗る	コーンにぶつけようとする
25	置いてあるボールを2つ持ち上げようとする	セーフティーマットの上に乗せ、その上にうつぶせで乗り、前転のようにひっくり返る	もたれかかる
26	3つ持って歩く	持ちながらセーフティーマットの上を走る	たたきながらはずむ
27	2つのボールを人に向かって投げる	持ったままボールで人を打つ	飛んできたボールをキャッチしようとする
28	平均台に乗りながら、両手で2つのボールを持ち、肩に乗せる	2つのボールを同時に転がす	
29	平均台に乗りながら、両手で2つのボールを持ち、かかえあげるように持つ	持ちながら平均台に乗り、転がる	覆いかぶさるように乗ろうとしながら平均台にぶつけ、跳ね返ってくる感触を楽しんでいる
30	フリーキックのように、置いてあるボールを蹴ってゴールをねらう	持ちながら平均台に乗り、ボールを落として平均台から降りる	セーフティーマットの上にボールに乗せる
33	片手でボールを転がして進む		セーフティーマットの上に寄せたボールに飛び込んで乗ろうとする
34	サッカーのドリブルをする		セーフティーマットに乗っているボールを様々な方向から見ようとする
35	いくつ持てるか挑戦しながら片付けをする		セーフティーマットに乗ったボールを、自分は床から離れないようにして手を伸ばして触ろうとする
36			セーフティーマットに乗ったボールを、自分は床から離れないようにして手を伸ばして押して前に進ませる

全体を通して、第1回目・第2回目にみられた動きは基本的には第3回目になっても見受けられた。特に、中ボールと大ボールを利用した動きを提示したことにより、これまでにみられないボールとの関わり・運動が見受けられるようになった。さらに、その一つ一つに＜運動の洗練化＞が進んでいることが窺われた。例えば、2つの小ボールを持ったまま平均台や跳び箱に乗り、そのままジャンプする（写真5）。あるいは、投げられたボールを避けつつ大ボールを走りながら転がす等、動きがスムーズになり、巧みさが増した。さらに、跳び箱に乗りながらも近くにある大ボールを転がそうとする等、ボールとの関わり方が明らかに変化していた（写真6）。



(写真5)



(写真6)

そして、第3回目で最も特徴的なことは、複数個のボールを持ちながら遊びが発展されたことと、中・大ボールでの遊びが明らかに増加したことである。ここでも、第1回目、第2回目同様、提示した運動が自由時間において多くみられた（写真7～写真10）。また、小ボールを持ちながら中ボール・大ボールを操作しようとする姿もみられるようになった。



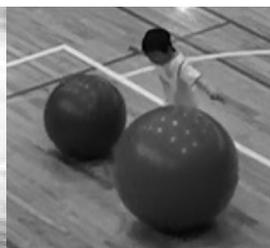
(写真7)



(写真8)



(写真9)



(写真10)

さらに、複数人でボールを操作する動きを提示したものの、反対に1人でボールを扱いたい気持ちが強くなり、今までは複数人でステージ上にボールを乗せていたことに対して、誰かが乗せようとするのを妨げて、自分だけで行おうとしたり、ステージに乗っているボールをもう一度フロアーに下し一人で行おうとしたりと、時には喧嘩が起きる場面もあった。反対に、できない子どもを手伝おうとする姿もみられたことから、難しい動きを達成できたことが自信になり、挑戦する意欲への一つの過程として見て取ることができた（写真11）。



(写真11)

IV. まとめ

指導者による運動の提示と遊びを組み合わせることで課外運動教室を展開してきたが、明らかに＜運動の多様化＞がみられた。しかも、運動の提示が＜運動の多様化＞に貢献できたことが明確になった。同時に＜運動の洗練化＞も確認でき、操作に関してはボールをうまく扱う子どもが増え、ぎこちなさがなくなってきた。またジグザグ走りがぎこちなかった子どもも、自ら挑戦するようになり、かつ巧みになってきた姿があった。体験したことのない運動が提示されたことで新たな運動の発見となり、それが意欲へとつながり、自然とそれらの運動を繰り返すことになったことが理由として考えられる。つまり、子どもは運動の繰り返しによって自然と＜運動の洗練化＞が起こってくるが、そのきっかけ作りとしての＜運動の多様化＞を目指した本研究の意図が達成されたと考えられよう。

本研究の遂行は、指導者の運動の提示の必要性を検証することも目的の1つであったため、指導者主導の時間と自由な遊びの時間を明確に分けた。そのため、子どもたち同士の動きを紹介し合うようなグループダイナミクス的手法をとることはなかったが、意欲を高めることが運動の発達に寄与できることを考えると、今後取り入れるべき必要性は十分にあるといえる。また、運動そのものの提示に重点を置くあまり、子どもたちの想像力を喚起させるような＜みだて＞を用いることもなかった²⁷。運動経験の中で多くの学びを得るためにも、遊びにおいての重要度が高い＜ごっこ遊び＞の要素も取り入れる必要性を感じた。この辺りのことを今後の課題としたい。

最後に、運動教室を行う上で忘れてならないことは、与えられた時間内で運動技術を洗練させていくことではなく、運動教室を終えた後の子どもたちに充実感や達成感が余韻として残り、園に戻った時、あるいは家庭に帰った時に、子どもたち自身によって遊びが展開されることを見通すことである。誤解を恐れずにいえば、子どもたちは運動を繰り返し、数をかけることによって自然と＜運動の洗練化＞が起こってくる。しかし、そのきっかけを与える指導者の存在がなければ、遊びや運動パターンに隔たりが生じてくることも確かである。特に本研究で扱ったボール遊びに関しては、野球やサッカー、バスケットボールやバレーボール、ラグビーと大きくメディアによって扱われ、子どもたちも目にし、遊びの中でその動きを真似する子どももみられる（ボールを蹴る際、ラグビー日本代表の五郎丸選手のルーティーンのパーズをとる子どもがいた）。しかし、ルールの中でプレイそのものに制約があるスポーツのみでは、自由な発想によるボールとの関わりはどうしても少なくなってしまう。それに貢献することもまた、課外運動教室の責務であるといえよう。

謝辞

本論文の執筆にあたり、課外運動教室の全般的な計画に関しては向田陽子氏に、分析に関しては東北文教大学付属幼稚園副園長酒井智子氏に多大なご協力と貴重なご助言を頂いた。また、東北文教大学付属幼稚園の先生方や東北文教大学短期大学部子ども学科の学生たちの協力があったからこそ子どもたちの生き生きとした活動を捉えることができた。伏して感謝申し上げる。

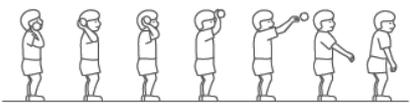
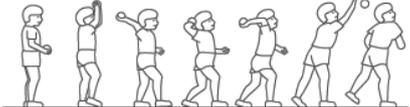
脚注

- 1 本論では、東北文教大学附属幼稚園の課外教室の一つである運動教室を課外運動教室と表記し、それ以外の運動指導の場面を運動教室と表記する。
- 2 石井裕明・阿部弘生・渡邊榮子・山崎裕美・加藤ゆき・五十嵐悠維・大場美咲「年中児における〈はずみ動作〉獲得に関する一考察：東北文教大学附属幼稚園課外運動教室のとりくみ」『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要』第5号, pp. 25-34, 2015.
- 3 吉田らは東京都、神奈川県、石川県、福岡県、佐賀県で開催された新任教員研修会を中心とする夏季研修会等に参加した幼稚園教諭753名を対象とし、私立幼稚園と公立幼稚園を比較・検討している。ちなみに、公立幼稚園の運動遊びのみを指導する指導者も私立幼稚園ほどではないにしても取り入れられている。(吉田伊津美・岩崎洋子「園での運動遊び指導と運動遊び指導に対する幼稚園教諭の認識：園での運動遊び指導に対する満足度と技術指導志向からの検討」：『発育発達研究』第64号, pp.18-24, 2014.)
- 4 特定の運動の上達を目指した技術指導が子どもの育ちを阻害することは1994年の時点で近藤によって既に指摘されている。(近藤充夫『幼児の運動と心の育ち』世界文化社, 1994.)
- 5 杉原隆・河邊貴子編『幼児期における運動発達と運動遊びの指導』ミネルヴァ書房, pp.52-53, 2014.
- 6 『幼児期における運動発達と運動遊びの指導』p54.
- 7 杉原隆・吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮・近藤充夫「幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係」：『体育の科学』第60号, pp.341-347, 2010.
- 8 吉田伊津美・杉原隆・森司朗「幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動指導の実態」：『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第58号, pp.75-80, 2007.
- 9 杉原隆「運動発達を阻害する運動指導」：『幼児の教育』第107巻第2号, pp.16-22, 2008.
- 10 吉田らによると、いわゆるスポーツのように決まった動きの反復が必要となるものを大人のスポーツ文化としている。この問題は「遊び」の定義といった非常に難しい問題に取り組む一つの方向性になると考えられる。
- 11 中村和彦ほか「観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達」：『発育発達研究』第51号, pp.1-18, 2011.
- 12 「観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達」, pp.1-18.
- 13 『幼児期における運動発達と運動遊びの指導』, p.49.
- 14 例えば「幼児期運動指針」では〈動きの多様化〉・〈動きの多様化〉(下線筆者)と表現されている。本研究では、動きそのものだけでなく、ボールを含めた用具との関わり方も多様化・洗練化の方向として考えるため、〈運動の多様化〉・〈運動の洗練化〉として表現することとする。
- 15 文部科学省幼児期運動指針策定委員会『幼児期運動指針ガイドブック～毎日、楽しく体を動かすために～』p.12, 2012.
- 16 吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮「保育者によって観察され

た基礎的運動パターンと幼児の運動能力との関係」：『発育発達研究』第68号，pp. 1-9, 2015.

¹⁷ 日本発育発達学会編『幼児期運動指針ガイド』杏林書院，pp.7-8, 2014.

¹⁸ 『幼児期運動指針ガイドブック』には、下記のように投げる動作の発達段階の特徴について整理されている。これが、＜運動の洗練化＞の過程とみてとることができよう。

「投げる動作」の動作発達段階の特徴		動作パターン
パターン1	上体は投射方向へ正対したままで、支持面(足の位置)の変化や体重の移動は見られない	
パターン2	両足は動かさず、支持面の変化はないが、反対側へひねる動作によって投げる	
パターン3	投射する腕と同じ側の足の前方へのステップの導入によって、支持面が変化する	
パターン4	投射する腕と逆側の足のステップがともなう	
パターン5	パターン4の動作様式に加え、ウィンドアップを含む、より大きな動作が見られる	

(『幼児期運動指針ガイドブック』p.13.)

¹⁹ 体育科学センター調整力専門委員会体育カリキュラム作成小委員会「幼稚園における体育カリキュラム作成に関する研究（Ⅰ）—カリキュラムの基本的な考え方と予備調査の結果について—」体育科学8，pp.150-155, 1980.

²⁰ 『幼児期運動指針ガイドブック』p.9.

²¹ 中村和彦『運動神経がよくなる本』マキノ出版，2011，2015（第4刷）.

²² 古屋朝映子・田村元延「幼児の自発的な動きを引き出す遊具に関する事例研究：使用方法を示さない遊具『ビリボ』に着目して」『体操研究』第11号，pp.1-9, 2014.

²³ 『幼児期における運動発達と運動遊びの指導』，pp.52-53.

²⁴ 『幼児期における運動発達と運動遊びの指導』，p.54.

²⁵ そもそも遊びは自由であるからこそ遊びである。本論では、動きの提示とボール遊びを分けながら進行したため、文中で自由時間と表記する場合は、指導者が動きを提示するのではなく、子どもの思いにまかせてボールと関わる時間を指すものとする。

²⁶ 「年中児における＜はずみ動作＞獲得に関する一考察：東北文教大学付属幼稚園課外運動教室のとりくみ」

²⁷ 例えば杉原は、施設や用具には運動パターンとそのバリエーションを引き出す以外にも、様々な対象物と関わることにより、身の回りの性質や仕組みに気づき、いろいろ試したり工夫したりして活動することにより運動好奇心や知的発達を刺激し、領域「環境」のねらいを達成するよい活動になり、そのためにも遊具を固定的に考えたり、いつも同じような施設や用具を使ったりしていることは好ましくないと述べている。（『幼児期における運動発達と運動遊びの指導』 p.49.）